

## 【旧約聖書日課】サムエル記上 16章1～13節

1主はサムエルに言われた。「いつまであなたは、サウルのことを嘆くのか。わたしは、イスラエルを治める王位から彼を退けた。角に油を満たして出かけなさい。あなたをベツレヘムのエッサイのもとに遣わそう。わたしはその息子たちの中に、王となるべき者を見いだした。」<sup>2</sup>サムエルは言った。「どうしてわたしが行けましょうか。サウルが聞けばわたしを殺すでしょう。」主は言われた。「若い雌牛を引いて行き、『主にいけにえをささげるために来ました』と言い、<sup>3</sup>いけにえをささげるときになったら、エッサイを招きなさい。なすべきことは、そのときわたしが告げる。あなたは、わたしがそれと告げる者に油を注ぎなさい。」<sup>4</sup>サムエルは主が命じられたとおりにした。彼がベツレヘムに着くと、町の長老は不安げに出迎えて、尋ねた。「おいでくださったのは、平和なことのためでしょうか。」<sup>5</sup>「平和なことです。主にいけにえをささげに来ました。身を清めて、いけにえの会食と一緒に来てください。」

サムエルはエッサイとその息子たちに身を清めさせ、いけにえの会食に彼らを招いた。<sup>6</sup>彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だ、と思った。<sup>7</sup>しかし、主はサムエルに言われた。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」<sup>8</sup>エッサイはアビナダブを呼び、サムエルの前を通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」<sup>9</sup>エッサイは次に、シャンマを通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」<sup>10</sup>エッサイは七人の息子にサムエルの前を通らせたが、サムエルは彼に言った。「主はこれらの者をお選びにならない。」<sup>11</sup>サムエルはエッサイに尋ねた。「あなたの息子はこれだけですか。」「末の子が残っていますが、今、羊の番をしています」とエッサイが答えると、サムエルは言った。「人をやって、彼を連れて来させてください。その子がここに来ないうちは、食卓には着きません。」<sup>12</sup>エッサイは人をやって、その子を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ。」<sup>13</sup>サムエルは油の入った角を取り出し、兄弟たちの中で彼に油を注いだ。その日以来、主の霊が激しくグビデに降るようになった。サムエルは立ってラマに帰った。

## 【使徒書日課】テモテへの手紙一 1章12～17節

<sup>12</sup>わたしを強くしてくださった、わたしたちの主キリスト・イエスに感謝しています。この方が、わたしを忠実な者と見なし、務めに就かせてくださったからです。<sup>13</sup>以前、わたしは神を冒瀆する者、迫害する者、暴力を振るう者でした。しかし、信じていないとき知らずに行ったことなので、憐れみを受けました。<sup>14</sup>そして、わたしたちの主の恵みが、キリスト・イエスによる信仰と愛と共に、あふれるほど与えられました。<sup>15</sup>「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた」という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。わたしは、その罪人の中で最たる者です。<sup>16</sup>しかし、わたしが憐れみを受けたのは、キリスト・イエスがまずそのわたしに限りない忍耐をお示しになり、わたしがこの方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となるためでした。<sup>17</sup>永遠の王、不滅で目に見えない唯一の神に、誉れと栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

## 【福音書日課】マルコによる福音書 10章17～31節

<sup>17</sup>イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」<sup>18</sup>イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない。<sup>19</sup>『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」<sup>20</sup>すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。<sup>21</sup>イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」<sup>22</sup>その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさん財産を持っていたからである。

<sup>23</sup>イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」<sup>24</sup>弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは更に言葉を続けられた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。<sup>25</sup>金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」<sup>26</sup>弟子たちはますます驚いて、「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言った。<sup>27</sup>イエスは彼らを見つめて言われた。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」<sup>28</sup>ペトロがイエスに、「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」と言いました。<sup>29</sup>イエスは言われた。「はっきりしておく。わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれでも、<sup>30</sup>今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける。<sup>31</sup>しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」

### 「わたしに従いなさい」

伝統的な教会暦で一年ひと巡りの終わりとして定められてきた「終末主日」を、わたしたちの教団では「収穫感謝日」ともしてきました。一年の中で最も大地の実りを実感するこの季節に、その実りの収穫を、神のお与えくださる恵みとして感謝し、共に分かち合い、喜び祝う。その「収穫感謝」の営みはまた、わたしたちが地上を生きる者として、神から人生の実りを与えられていること、それぞれの人生そのものを神が終末のときに収穫なさる地の実りとして豊かに育んでいただいていることを、心に留め、共に感謝し、喜び祝うときでもあるのです。

主イエスに従う人生。わたしたちは、教会に導かれ、聖書の御言葉を与えられ、キリストと出会うことを通して、わたしたちの人生が主イエスに従う人生であることによって、より大きな実りを与えられること、実りをますます豊かなものとしていただけることを知らされてきました。その実りを心に留め、共に感謝し、喜び祝う教会の交わりに連なる仲間と共に、「わたしに従いなさい」とお呼びかけくださる主イエスに従う人生の道を、歩み始めてきたのです。

そのような人生の道を、最後までまっとうすること。それは、決して容易なことではないと思います。主イエスに従う道は、必ずしも世の慣わしや考え方とは一致しないことがあるからです。その上、「あなたに欠けているものがある」と問い質されるようなことがあるならば、わたしたちは、途端に自信を失ってしまうことでしょう。教会の内外で起こっていることを見るならば、それは「人間にできることではない」と言わざるを得ないとさえ思います。

## 「あなたに欠けたもの」

それでも、わたしたちを教会へとお導きくださり、御言葉を通して教え、養ってくださり、わたしたちに主に従う道の歩み方、生き方を先だってお示しくくださる主イエスは、わたしたちをなお先の旅へとお連れ出しになられるのです。教会暦のひと巡りを終えて、一人ひとりに成績をお付けになられて「これでおしまい」とはなさいません。再び始まる新しい教会暦のひと巡りに向けて、新しい旅支度を始めるようにと、促してくださっているのです。

福音書日課が物語るのは、主イエスが、弟子たちを連れて歩いてこられた旅を、さらに先に進めようとなさっていたときのことです。そのとき、主イエスのもとに走り寄ってきた一人の男。旅支度をされている主イエスに、今、どうしても聞いておきたいと思ったのです。おそらく、彼自身はその旅に同行することができない事情があったのでしょう。「**善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。**」そう主イエスに尋ねた彼は、こう思っていたのではないのでしょうか。「自分は、あの弟子たちのように四六時中、主イエスに従って歩いていくことはできない。けれども、この先生は本物だ。自分が成長し、信仰を完成させるためには、この先生の教えの極意を伝授してもらう必要がある。今、そのことを聞かなければ、チャンスを逃してしまうかもしれない。

ところが、主イエスのお答えは、その人にとっては期待外れでした。「『**殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え**』という掟をあなたは知っているはずだ」。わたしたちも知っている、モーセの十戒の教えです。彼は、もちろんこの教えを知っていました。守ってもしました。しかし、彼が期待していたのは、そういうことではなかったのです。聖書に書かれていて、読めばわかるようなことを、期待していたのではなかった。聖書にははっきり書かれていないような、けれども、それさえ知っていればあとは自分で何とかやっつけけるような、教えの極意、秘訣を、知りたかったのです。自分は主イエスの旅に従って行くことができないと思っていたからです。彼には、自分の人生があり、自分の生活があったのです。それを捨てて、主イエスの旅に従って行くことはできない。そうだとすると、主イエスに教えの極意を伝授してもらえば、自分ひとりでも何とかやっつけけるに違いない。そう考えて、教えを請うたのでしょう。

「**あなたに欠けているものが一つある**」。そうおっしゃられて、主イエスは、彼に、自分の財産を置いて、従ってくるようにとお呼びかけになられました。彼は、**たくさんのお金を持っていた**のです。あまりに多くのものを抱え、背負っていました。それを降ろすことさえできずに、今までの人生を耐えて走ってきたのに違いありません。その大きな荷物を、どう降ろしたらよいのか。彼には、分かりませんでした。

主イエスは、彼のことを、財産があるからといって拒まれたわけではないのです。ご自身の旅に従ってくることを期待し、願ってくださっていました。ご自分に従う仲間に加わるようにと、お招きくださったのです。けれども、彼は、一人でした。一人で生きてきました。一人で行くことしか、想像できなかったのです。

## 「これがその人だ」

わたしたちの中には、財産のある者も、そうでない者もあるかもしれません。しかし、何も持たない者はいないでしょう。ペトロのように「何もかも捨ててあなたに従って参りました」と言えるような生活をしてきた者でさえ、そのように生きてきた自分自身の過去を誇りして、決断した自分そのものを手放せないものとして抱え込んでいることがあるのです。「それを、全部捨てて来なさい」と言われても、どう捨ててきたらよいのかさえ分からないところがあるのです。

それでも、主イエスは、わたしたちにお呼びかけ続けてくださっているのではないのでしょうか。「抱えこんでいるものを手放して、背負い込んでいる荷物を降ろして、身一つで、従って来てみなさい。ただ、従う弟子たちの仲間に加わってみてごらんください」。あの、いったんは**気を落として、悲しみながら立ち去った**人にも、主イエスは、なお、お呼びかけ続けてくださったのではないのでしょうか。「先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」ことをご存じで、「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ」と神こそを信頼なさって、「わたしに従いなさい」との招きを、今に至るまで、続けてくださっているのではないのでしょうか。

使徒パウロは、若き伝道者テモテに宛てた手紙で、自分自身がどのようにして主イエスに従って来たのかを、記していました。パウロは、自分が「**罪人の最たるもの**」だったのに「**憐みを受けた**」と言います。頑固で、なかなか自分が抱えて込んでいるものを手放さない自分に対して、主イエス・キリストは、**限りない忍耐をお示し**くださった、と言うのです。背負いきれないほどの多くのものを自分ひとりで背負い続け、なお多くのものを背負える者になろうとしていたパウロが、その荷を降ろし、身軽になって主イエスに従い、自分一人ではなく、主イエスに従う仲間と共に歩いていく自由を得るようになるまでに、主イエスがいかに忍耐して待ち続けてくださったか、憐みを示し続けてくださったか。「自分は、そのような主イエスの憐みによって、新しい命の道に歩み出すよう導かれた者の、見本なのです」。パウロがそう告白するのは、わたしたちキリスト者すべての告白でもあるのです。

旧約の物語。初代イスラエル王サウルに代わる新しい王として、**ダビデ**が選ばれました。それは、**ダビデ**が王としてふさわしいと、だれもが認めたからではありませんでした。ただ、神がご自身の「**心によって**」、**ダビデ**を見いだされ、「**これがその人だ**」とお立てくださったのです。そのような者に、油が注がれました。「油注がれた者」＝「メシア／キリスト」とされました。主イエスご自身が、そのようにして神に選ばれ、立てられたお方でした。そのようにして、わたしたちの命の道をお示しくださる見本、手本となってくださいました。

わたしたちも、「これがその人だ」と主の前に立たされ、洗礼という油注ぎをしていただけてきました。主が、また新たに「これがその人だ」とお立てくださる者のための見本とされるためです。主の忍耐と憐みをおぼえて、わたしたちは、その一人に油を注ぎ、共に主に従う仲間として立たせ続けるのです。